学位論文要約

Manas “Mind” in the Didactic Discourses in the *Mahābhārata*

京都大学文学研究科
髙橋健二

本研究では、古代インド叙事詩『マハーバーラタ』第 12 巻解脱品を中心として、本叙事詩の様々な教説における manas「心」の概念を扱う。先行研究では、『マハーバーラタ』の諸教説は古典期のサーンキヤ・ヨーガ哲学の原型として捉えられ、古典期サーンキヤ・ヨーガ哲学において重要な役割を果たす puruṣa や prakṛti などの概念や、『マハーバーラタ』の諸教説において初めて現れる kṣetrajña や jīva などの概念が主として研究対象とされてきた。一方 manas は、古典期サーンキヤ・ヨーガ哲学では重要な役割を果たすことはなく、また『マハーバーラタ』以前の文献にも広く用いられるため、先行研究において注目されることが少なかった。本研究では、manas という概念には『マハーバーラタ』以前から様々な思索や意味が積み重ねられており、『マハーバーラタ』の諸教説に見られる思索はそのような先行思想に依拠しつつ、独自の展開を見せていることを示す。

序論となる第 1 章では、上述の問題設定を行い、さらに先行研究の批判的検証を通して『マハーバーラタ』の諸教説を研究するにあたっての問題点を明らかにし、本研究で用いる研究方法を提示した。

『マハーバーラタ』の諸教説は、その思想を忠実に伝承する伝統が途絶えてしまったために、現代の研究者はその思想的背景や他の文献との関係について補足を施しながら理解する必要がある。これまで多くの先行研究によって様々な視点が提供されてきたが、それらは必ずしも明確な根拠があるわけではない。例えば Johnston, E. H. *Early Sāṃkhya* (1937) は、『マハーバーラタ』の諸教説を、当該の思想がより発展しているかどうか、あるいはより複雑に見えるかどうかによって発展段階に振り分け、その発展段階を前提として教説の発展史を論じている。しかしすべての教説が特定の哲学学派の様々な発展段階であるという前提は受け入れがたく、また現代の研究者から見てより発展していると思われるかどうかが実際の歴史的発展に一致するかどうかも疑わしい。そのため、本章ではまず各研究がどのような前提に基づいているのかを精査し、その前提の多くは文献学的に正当化できないことを示した。そこで明らかになったことは、異なる思想を発展段階に分類するのではなく、

Frauwallner, E. *Geschichte der indischen Philosophie,* Band I (1953)、Malinar, A. “Philosophy in the *Mahābhārata* and the History of Indian Philosophy” (2017) が提唱したように、各説をそれ自体として研究する個別的アプローチの必要性である。しかし個別的アプローチだけでは、『マハーバーラタ』諸教説の研究としては十分であるとは言えない。『マハーバーラタ』やそれと同時代の教説群の特徴の一つは、一つの教説について多くの並行関係にある説が存在することであり、それらの借用や影響関係を分析する明確な方法論が必要である。

本研究では個別的分析と比較的視点を合わせた統合的分析を提唱した。まず個別研究によって、写本間の異読や指示代名詞の照応関係のねじれなどといった「テキスト上のひずみ」（textual rupture）を分析し、その「テキスト上のひずみ」を手掛かりに、並行関係にある他の説との比較から、他の説からの借用や影響関係を証明しようとするものである。「テキスト上のひずみ」と並行関係は、片方だけでは偶然による産物である可能性もあるため、該当部分が後からの付加であることの十分な根拠とはなりえない。しかし個別的分析と比較研究両方が当該詩節が他からの借用による付加であることを示すならば、それは高い蓋然性をもつと考えられる。

さらに先行研究では、『マハーバーラタ』の諸教説は、初期サーンキヤ哲学あるいは初期サーンキヤ・ヨーガ哲学と呼ばれてきた。しかし、その呼称の根拠は多くの場合、古典期サーンキヤ・ヨーガとの類似性であり、そのような類似性は研究者の主観的判断に委ねられてきた。このことはサーンキヤ・ヨーガ学派の形成史を考える上で大きな問題であるだけでなく、「サーンキヤ・ヨーガ」といった呼称によって、本研究で扱う manas の概念のように、サーンキヤ・ヨーガ的でないものが無視される傾向を招いてしまうことになる。本研究では、教説自体がテキストにおいてどのように呼ばれているかによって哲学の呼称を決定することを提唱する。テキストを精査すると、サーンキヤ・ヨーガだけでなく、アディヤートマという語も思想潮流の名称として重要であることがわかった。

第 1 章で行なった問題設定および研究方法についての議論をもとに、第 2 章では manas を中心とする創造説、第 3 章では manas による鍛錬を説くヨーガ修行論をそれぞれ分析する。

第 2 章では、ヴェーダ文献から『マハーバーラタ』までの創造説の系譜から manas とそれに付随する概念の発展の過程をたどった。Gonda, J. “The Creator and his Spirit (Manas and Prajāpati)” (1983) が指摘したように、manas が創造説において語られる理由は、manas は創造神の創造意欲を象徴することである。第 2 章第 1 節では、『マハーバーラタ』の諸教説における創造説に強い影響を与えたと思われる『シャタパタ・ブラーフマナ』第 10 巻第 5 章第 3 節の創造説における manas の意味を分析した。『シャタパタ・ブラーフマナ』第 10 巻

第 5 章第 3 節では sant-asant、すなわち、「現前しているもの」と「現前していないもの」との両極性を manas において認め、manas について祭式学的な思索を展開する。それによると、創造過程とは、完全に現前しているわけでも完全に現前していないわけでもない manas がより現前しているものへと変化することである。それは祭式学的文脈では、manas によって企図したことを言葉として表現すること、そして究極的にはそれをマントラとして口に出すことを意味する。この創造説は、『マハーバーラタ』第 12 巻第 224–225 章および『マヌ法典』第 1 章 における四つの創造・帰滅説に受け継がれる。第 2 章第 2 節では先述の統合的分析方法を用いて、四つの創造説の前後関係を明らかにし、四つの説を以下の三つの発展段階に分類した。ブリグの創造説（『マヌ法典』1.74–78）およびヴィヤーサの創造説（『マハーバーラタ』12.224.11, 31–46）の中心部分は第一段階、ヴィヤーサの創造説全体およびヴィヤーサの帰滅説（『マハーバーラタ』12.224.74–225.16）は第二段階、マヌの創造説（『マヌ法典』1.14–20）は第三段階にそれぞれ分類できる。第一段階では、創造神ブラフマンとその創造意欲としての manas の関係性は明確であるが、一方で祭式学的考察は見られなくなる。manas によって創造されるのは五元素であり、さらにそれぞれの性質が説明される。ヴィヤーサの創造説では、sant-asant に端を発すると思われる未顕現と顕現との両極性が、ブラフマン神と manas にそれぞれ分担され、性質の観点から未顕現と顕現を明確に分割しようとする傾向が見られる。さらに第一段階の特徴は、世界の周期説と世界創造説がともに語られることである。第二段階の特徴は、様々な思想の挿入である。ヴィヤーサの創造説では、被造物の性質についてのいわゆる集積論、さらに七人のプルシャ説が挿入される。ヴィヤーサの帰滅説では、『マハーバーラタ』第 3 巻第 186 章におけるマールカンデーヤの帰滅説や『チャーンドーギャ・ウパニシャッド』第 7 巻からの影響が見られる。さらに第三段階のマヌの創造説では、ヴィヤーサの創造説からの明確な影響が見られるとともに、後代のサーンキヤ説に特徴的な mahant、ahaṃkāra、三つのグナ説が導入される。マヌの創造説やヴィヤーサの帰滅説は、叙事詩・プラーナ文献における様々な創造・帰滅説に大きな影響を与えており、本研究の成果を端緒としてさらに研究を進めることで、後代の創造・帰滅説の展開を追うことができるであろう。

第 2 章第 3 節では、『マハーバーラタ』第 12 巻第 175–180 章における Mānasa（「心よりなる」）と呼ばれる神による創造説を分析した。この教説においては、manas と自我（ātman）との間で主体性が重なり、そのために自我は「心よりなるもの」（mānasa）であるとされる。そして自我と創造神が同一視され、創造神が Mānasa と呼ばれることとなったと思われる。インド哲学一般においては、manas は自我にとっての作具であるとされる。しかし、manas が知覚を司り、自我が知覚の主体とされるのなら、manas と自我の概念は限りなく近くなる。そのことが示唆されているのが、『チャーンドーギャ・ウパニシャッド』におけるシャーン

ディリヤとヤージュニャヴァルキャとの対話であり、『マハーバーラタ』第 12 巻第 175–180 章もその系譜に属するものと思われる。

第 3 章では、二つのヨーガ説において manas についてどのような思索が展開されているのか分析した。第 3 章第 1 節では、ヴァールシュネーヤ・アディヤートマと名付けられている教説（『マハーバーラタ』12.203–210）における manas と manovahā （「心を運ぶ」）と呼ばれる脈管を中心とする心身論を分析した。manas はここでは、manovahā 脈管とそれに従属する数千の脈管の中を行き来することで体中に遍満し、自我と感覚器官・機能や運動器官・機能とを結ぶ役割を果たしている。さらに性的欲求が manas を圧倒する時、manas は manovahā 脈管を用いて、体のあらゆるところに存在する精液を集め排出するとされる。さらに臨終時には、ヨーガ行者は manovahā 脈管を用いて、manas を身体中に遍満させ生気を体外に押し出すことで解脱を得るとされている。この manovahā 脈管による解脱論は後代のハタ・ヨーガ体系における suṣumṇā 説や bindu 説を予見するものである。第 3 章第 2 節で検証したアラルカ王の物語（『マハーバーラタ』14.30）では、manas は通常状態においては、感覚機能に対して力を与えることで修行者の障害となる一方で、ヨーガにおいては、manas を集中させることでその力をヨーガに活用し、ヨーガの修行を速やかに完成させるものとして理解されていることがわかった。以上の二つの教説に共通していることは、通常どのように manas が働いているのかを分析した上で、その特性を用いて manas を解脱論に組み入れようとする傾向である。さらに manas と性欲との関係や、manas と戦闘における勇気との関係については、ヴェーダ文献に遡る可能性があることを示した。

結論となる第 4 章では、以上の研究成果を要約した上で、本研究のインド思想研究における意義について検証した。『リグヴェーダ』の時代から積み重ねられてきた manas についての様々な思想や思索は、『マハーバーラタ』の諸教説において、各々の教説の関心や思索の方向性にしたがって独自の形で発展していった。ヴェーダ期に繰り広げられた豊かな思索という土壌のおかげで、manas の概念は『マハーバーラタ』においてさらなる思索の発展の受け皿になったのである。

以上の本編のあとに、補遺として、本編で扱った『マハーバーラタ』中の教説に関する詳細な文献学的注釈をほどこした英訳、アディヤートマ(adhyātma)という用語に関する論考、および『マヌ法典』成立史についての論考を付した。